

平成二十八年年度

博士（文学）学位請求論文

内容及び審査の要旨

吉川 竜実

近世神宮考証学の研究

皇學館大学大学院

本論文は、近世後期に確立を見たとする「神宮考証学」の成立から大成にいたるまでを、その学的淵源と系譜、学の立場と目的及び方法と性格を探り、当該考証学の樹立・確立に重要な役割を果たした中川経雅・御巫清直を考察の中心にすえ、伊勢神宮の教学に係る特質の一端を、神宮祭祀の問題から、史料に基づき緻密かつ実証的に明らかにしたものである。

本論文の構成は、まず近世神宮考証学の確立へと至る過程を、古代から明治中期までの「神宮古典系譜」という観点から俯瞰し、「神宮根拠の学」の本質的課題を明示するとともに、「神宮考証学」の特色と役割を問いかけた総論にあたる第一編。近世中後期に神宮祭祀研究に多大な成果を残した中川経雅の人物像と学問を論じた第二編。そして近世後期から明治期にかけ、神宮制度改革期を挟む時期に、考証研究において重要な役割を果たした御巫清直の人物像と考証研究の内容を検証した第三編の三部からなり、補論として御巫清直の考証に基づく神宮神事絵画の紹介・考察が付されている。

まず、論文の全体構想を、その内容目次に従って示しておく。

序文

第一編 近世神宮考証学成立の過程（総論）——神宮古典系譜図について——

『神宮古典系譜図』

- 一 はじめに
- 二 古代（神代〜平安）
- 三 中世（鎌倉〜室町）
- 四 近世・近代（安土桃山〜明治）
- 五 おわりに

第二編 中川経雅の儀式研究

第一章 経雅の『大神宮儀式解』執筆

- 一 はじめに
- 二 中川経雅について
- 三 『儀式解』の執筆と神宮考証学の樹立
- 四 『儀式解』の特徴と本居宣長の『古事記傳』の影響

五 おわりに

第二章 経雅著『慈裔真語』について

一 はじめに

二 『慈裔真語』の成立と執筆の動機

三 『慈裔真語』の内容構成と分類

四 『慈裔真語』の執筆理念と儒学

五 おわりに

第三編 御巫清直の研究

第一章 清直の神宮観―神朝廷論を中心として―

一 はじめに

二 御巫清直について

三 清直の神朝廷論

四 清直の皇大神宮相殿神論と職掌人（内人・物忌）考

五 清直の神嘗祭観

六 清直の外宮（トツミヤ）思考と豊受大御神の御霊実観

七 おわりに

第二章 清直著『神朝尚史』の研究

一 はじめに

二 『神朝尚史』の構成と内容

三 『歸正鈔』執筆の考証理念と『神朝尚史』の編纂

四 第五十六回式年遷宮と清直の神宮考証学における『神朝尚史』の位置

五 『神朝尚史』の成立と平田篤胤の『古史成文』の影響

六 おわりに

第三章 神宮常典御饌考―清直著『御饌殿事類鈔』を通して―

一 はじめに

二 外宮の鎮座と御饌殿

三 御饌殿の殿舎及神座（装束）と常典御饌の神饌

1 殿舎

2 神座（装束）

3 常典御饌の神饌

- (1) 御水 (2) 御飯（御米） (3) 御塩 (4) 御贄

四 常典御饌の行事次第と総御饌

1 行事次第

2 総御饌

五 常典御饌の意義

1 常典御饌奏上祝詞

- (1) 『御饌殿事類鈔』所収祝詞

- (2) 『常典御饌奉仕次第』所収祝詞（明治御改正以前）

- (3) 『外宮常奠御饌奉仕式』所収祝詞（明治四〇五年）

- (4) 『神宮明治祭式』所収祝詞（明治五年以降）

2 祭祀空間

六 おわりに

補論 御巫清直考証神宮神事絵画について

一 齋内親王参宮圖

二 皇大神宮神嘗祭舊式祭典圖（奉幣之儀）

三 皇大神宮舊式遷御圖

第一編は、本研究の目的と対象を明らかにするとともに、研究の立場と視角を明確化した内容であり、吉川氏の立脚点と学的背景がうかがえる。氏は、平安初期の神宮祠職による『延暦儀式帳』の撰進を「神宮学」の起点と位置づけ、以後、中世、近世、そして近代へと至る神宮学者の流れを「神宮古典系譜」という観点から整理し、「神宮学」の台頭、展開を時系列に沿って検討の上、室町中期の内宮禰宜・荒木田氏経が果たした重要性、そして近世における「神宮考証学」の形成・確立という、本研究の主題の意図を明らかにしている。ここで吉川氏が捉える、「神宮学」とは、「神宮が拠って立つところの学問である神宮根拠の学」であり、その性格は、「神宮祭祀の永遠性と厳正とを護持する護教学」とする。そして、「神宮考証学」は、「神宮学」に含まれるが、その学的営みの中心人物を神宮祠職において捉えられている。すなわち、近世の「神宮考証学」は、江戸後期に本居宣長の国学を積極的に受容することで中川経雅が樹立し、藺田守良が継承、足代弘訓・橋村正兌による発展を経て、御巫清直による大成と見ている。

本編での考察の特徴は、(1)『神宮古典系譜図』として提示した、神宮祠職の学問の系譜の整理と、(2)神宮学の時代的区分を、古代(神代く平安)、中世(鎌倉く室町)、近世・近代(安土桃山く明治)として捉えるところにある。前者は、記紀律令などの古代文献から中世の仏教者の手になる参詣記までにおいて、神宮の事柄が登場し扱われた古典を「都(中央)等」の流れと見た上で、そこに随従させる形での「皇大神宮(内宮)」と「豊受大神宮(外宮)」の神宮内部記録や祠職の著述を対比させることで、神宮学の流れを検証しており、これまでにない体系的な示し方といえる。そして、この概観に基づき、後者の時代区分の観点からは、近世神宮考証学の成立には、室町期から近世初期く中期が注目されるとする。具体的には、室町期の「藤波氏経はじめ藺田守晨・守武といった内宮禰宜を勤めた神宮学術グループ(氏経学)」から、江戸初・中期の出口延佳・久志本常彰たちによる、豊宮崎文庫を拠点とした外宮祠職たちの「延佳学」グループとしてまとめるとともに、それらの流れが近世の「神宮」考証学を生み出しているとの指摘である。

吉川氏は、当初神宮学の担い手は、神宮の祭祀と運営に責務を持つ禰宜層から、時代が下るにつれ権禰宜層へとその裾野が広がること、また神宮全体として俯瞰した場合に、学の担い手が、時代により内宮と外宮それぞれの祠職グループによる学術の興隆時期に位相があるところから、「内外宮学問交代論」ともいえる状況として新たな捉え方を示している。ここ

に述べられた交代論は、「神宮古典」として世に知られる著述類を基本とするものであるが、一方で祠職としての各家内部で伝えられる「知」のあり方や文献資料の残存状況の問題等への検討も必要と思料されるところであり、容易に「交代」と称し得るかどうかは、今後の課題点として指摘しておきたい。

吉川氏の考察の背景には、「神宮学」の基本として神宮祭祀の本旨への深い洞察を示した藤波氏経を起点とする捉え方と、その存在の重要性が置かれており、神宮の基本的性格を祭祀齋行の問題から、考証学の問題をとり扱う点は、一つの見識を示すものとして高く評価される。

ただし、吉川氏が「神宮学」の性格を護教学とする場合に、その学としての特徴や内容、また「護教」の性格について丁寧に論じておく必要性もあろう。護教学とされる場合、それが神宮内部における問題と外部との関係における問題として課題を設定した時に、「神宮祭祀の永遠性と厳正とを護持」という理念が、思想的言説として表出される場合と神宮古典を根拠として考証するという立場とがどのように交差・連関しあうのかという問題を説いておくことも重要ではないかと思われる。神宮内部における学問への機運の高まりや隆盛が促されるには、そこに神宮という存在の大きさが有する時代性や思潮との関りもある。この問題は、明治四年の神宮改革に伴う、諸変革期のなかで神宮祭祀の伝統性保持と課題に向き合った御巫清直の研究が、本研究における柱の一つとなっていることから、吉川氏には、その問題が十分意識されていることがうかがえるが、神宮学の独自性を捉える上では重要な課題と考えられる。

次いで第二編は、中川経雅の儀式研究を、その代表的著作である『大神宮儀式解』と、従前未刊であったが吉川氏が共同で翻刻を行った『慈裔真語』を対象に、前者の内容分析を通して本居宣長との学的交流におけるなかでの神宮考証学の性格と方向性を実証的に解明し、併せて後者へ注目することで、経雅自身の学的立脚点を内面から捉えたものである。

ここでの研究の主眼は、(1)先行研究をもとに、中川経雅の学問を中心とする伝記の再検証、(2)代表的な著述である『大神宮儀式解』執筆の動機・成立時期と近世考証学の樹立、(3)本居宣長との交流のなかで完成を見る『儀式解』の特徴や記述法を明らかにする上での『古事記伝』との関係個所の綿密な比較、(4)経雅が子孫へ残した教訓書・遺言書と評される『慈裔真語』の成立、執筆動機、内容、執筆理念の解明の四点からなる。

本編で示された研究では、吉川氏の真摯な神宮祭祀研究の成果が認められるとともに、中川経雅の伝記や学問についての先行研究を丹念に再検証し、幼年期における遷宮奉仕の事実など新たな指摘を行うなど、これまでの学的成果を振り返るこ

とで、経雅の果たした役割の大きさを明らかにしている。また、従前十分に研究されなかつた経雅の人物像を明らかにする上で貴重な名著『慈裔真語』という大部の著述の本格的な内容分析を行うなど大きな意義を有すると評価できる。

経雅の学を論じる上で吉川氏は、彼が最も敬慕し影響を受けた人物として、藤波氏経の存在をあげ、時代を隔てるが両者に共通する禰宜職補任の状況と祭祀にかかる著述を残していること、また『慈裔真語』の分析から、経雅にとって「氏経学」が必要であったことなどへの論証が深められている。

『大神宮儀式解』の成立について吉川氏は、『古事記伝』との内容的な関係事項を丹念に読み解き、両者の交流、すなわち宣長の閲覧と批評を経ていることや経雅の身辺事情などを丁寧に検証したうえで、安永四年脱稿、天明元年五月を完成の下限としている。また、『儀式解』における最も大きな宣長の影響は、『皇太神宮儀式帳』の全条文の読み、注解の施し方における『古事記伝』の記述法であり、そのスタイルが後の神宮考証学者の記述法を規定するところとなつたと指摘している。

本編において、吉川氏は、先学による中川経雅の伝記研究の妥当性の検証、『儀式解』執筆の意図として、禰宜職が担う神宮の「祭祀の厳修」と「経営」の責務からくる旧儀・神地の再興の誓願、「氏経学」の存在の重要性、また『儀式解』で採られた宣長の史料引用法や論説法、記紀・万葉集の多用、そして『儀式解』の記述法が近世神宮考証学の嚆矢として位置づけられることを明示しており、これら諸点は、それぞれに妥当性を有する内容と認められる。

ただし、本論での課題は、「記述法」というスタイルがもつことへの意味付けの問題である。確かに経雅の考証対象は、神宮祭祀の「規範」とされる『皇太神宮儀式帳』であり、その解読と理解が重要な点は理解されるところであり、またそこには「氏経学」を自覚するところから生み出されてくるところも吉川氏の説く通りであろう。問題は、経雅による古典の注解作業を江戸期における古典注解の全体像のなかに位置付けて捉える必要性と、テキストを如何に解釈するかという認識の問題が残されているように思われる。古典を活用することで、テキストの考証が進められるというあり方は、方法論として学の成立を論じる上で重要であることはいうまでもないが、考証研究から何が課題として生み出されてきたのかという点について、神宮祭祀の理念と制度・実修との一致と乖離の問題についてさらに深められることを期待したい。また、経雅が理想とする氏経の手になる祭祀記録などを通して、氏経自身の行為を「氏経学」と措定し得るかは疑問点であり、当時における古記録書写の一般的な態度や状況などから論じられる必要もあろう。

いくつかの課題は存するとはいえ、本編に展開された諸論は、今後の経雅研究において踏まえるべき研究として、その位

置を獲得したものと高く評価できる。

最後の第三編は、明治四年の神宮改革前後を祠職として奉仕し、近代になり大きく改正された神宮祭祀の古儀考証と、新たな神宮祭祀のあり方に学術面で重要な役割を果たした御巫清直の本格的な研究となっている。ここでは清直の神宮観、特に「神朝廷観」の内容と根拠、清直著『神朝尚史』の内容と編纂意識・意図、編纂に通底する平田篤胤の影響などが具体的実証的に解明されている。また、神宮祭祀上で重要な位置づけにある「常典御饌」とそれが行われる「御饌殿」の祭祀について、清直の『御饌殿事類鈔』を通して解明を試み、神宮成立にかかる諸議論の課題や問題点への考察を深めている。

清直の研究にあたり、吉川氏は、すでに公刊されている清直の著述である『神宮神事考證』（大神宮叢書所収）にとどまらず、これに漏れた家職や作成祝詞をはじめとする清直の大部の執筆原稿を『御巫清直未公刊資料集―神宮神事考證拾遺―』（平成八年）、『神宮神事考證 補遺上下』（増補大神宮叢書所収、平成二二・二三年）として翻刻にたずさわり、そうした基礎研究に基づいており、内容的に充実が図られている。この点では、現在の清直研究を牽引する役割を果たしているとともに、今後の研究進展に重要な位置を占める内容といえる。

ここでは、従前希薄であった清直の思想研究を深める観点から、大きくは清直の神宮観と祭祀観とに焦点が当てられている。それに当たり、清直に先行する神宮部内の考証学者である中川経雅や菌田守良の「神宮Ⅱ神朝廷」思想が、どのように深化されているかを検証し、「皇大神宮相殿神論と職掌人（内人・物忌）」の問題、神宮の年中祭祀の重儀である神嘗祭観、そして『御饌殿事類鈔』に論じられている「外宮（トツミヤ思考と豊受大御神の御霊実観）」の検討に力が注がれている。

清直に関する大部の研究において、吉川氏は、近代における神宮制度改正後に斎行された第五十六回式年遷宮（明治二十二年）における、清直の考証態度や祭儀実施に直接かわる考証内容についての検討を進め、そこに近世神宮考証学の完成の姿を見出している点は、説得性のある内容といえる。吉川氏が指摘するように、清直の考証学が、神宮の「斎庭」における奉仕と学問研究とが連結している点、神宮祭祀の本義・古儀並びに神宮古伝への追及と解明、文献・史料研究のみならず実地踏査を踏まえて考証を進める方法に特徴を見出していることは、神宮考証学の特色を把握するうえで重要な指摘と見られよう。

また、清直の神宮観の検討を通して浮かびあがる、朝廷祭祀と「神朝廷」（神宮）での祭祀との関係における、皇大神宮の相殿神理解（朝廷における天皇と古代の二大祭祀氏族との比定）、神宮の内人・物忌職制理解（朝廷の舎人と采女の關係

に比定)、大嘗祭と神宮の神嘗祭との対比理解(主旨・祭儀式等的一致)、トツミヤ(外宮)を本来は御饌殿を指すとの指摘、豊受大神宮の霊実を清直が古伝と考える『大倭本紀』の本文に見える齋鏡とする理解のありかたなど、重要な問題を、学界における諸議論なども踏まえ検討が加えられており、今後の神宮祭祀研究における課題を抉り出した内容といえる。

本編においても、吉川氏の神宮祭祀にかかる実修経験と学術研究の両面からの研究成果が発揮されており、特に御饌殿祭祀の内実が、清直の考証研究を再検証する中で明示され、以降の祭祀研究に裨益するところ多大であるといえる。

なお、御巫清直の祭祀考証の成果が反映された資料として、神宮神事を描写した絵画について、その写真資料とともに解説が補論として付されており、研究者にとり益するところが少なくない。

以上、本論文は、伊勢の神宮における祭祀を主軸においた神宮祠職の学術研究のあり方を、「神宮考証学」と位置付けるところから出発し、先行研究を十分に踏まえつつ、近世における、神宮考証学の成立と完成にいたるまでを、神宮祠職であり令名の高い学者の著述をもとに分析することで、考証学の目的、方法、内容を明らかにしたもので、その重要人物として取り上げられた中川経雅、御巫清直の研究は他の追従を許さない成果と高く評価できる。本論文で示された論の構成、論述の方向性、史料提示の客観性、検証の手法なども十分であり、博士論文として認めることが妥当である。

学位請求論文最終試験報告書

吉川 竜実

右の者について、学位請求論文に関する審査及び最終試験を行い、その結果審査に合格したものであることを認める。

平成二十九年三月三日

審査委員 主査 櫻井 治男

(本学教授)

副査 岡田 登

(本学教授)

副査 加茂 正典

(本学教授)